

## HBP Surgery Week2024 参加報告

セッション：

### Korea-Japan Educational Collaboration Meeting for young HBP surgeons

司会：

調 憲（群馬大学）, Jeong-Ik Park (University of Ulsan)

発表者：

- Special lecture: Tips for successful medical presentation  
Abigail Shin (Seoul National University)
- Journey to a HBP surgeon in Japan  
石井範洋（群馬大学）、冲永裕子（都立駒込病院）
- Journey to a HBP surgeon in Korea: Special experiences  
Seok-Hwan Kim (Chungnam National University), Dakyum Shin (Chosun University)
- Panel Discussion: Comparison of HBP surgeon training between Korea and Japan  
Seok-Hwan Kim (Chungnam National University), Yoo Jin Choi (KOREA University)  
楊 知明（京都大学）、小齊侑希子（福岡東医療センター）、  
松尾泰子（奈良県立医科大学）、前川 彩（がん研有明病院）、原 貴信（長崎大学）

2024年3月20日から23日までソウルで開催された2024 HBP Surgery Weekにて、Korea-Japan Educational Collaboration Meeting for young HBP surgeons というセッションに参加して参りました。日本肝胆膵外科学会 Next Generation Project (NGP)メンバーからは石井範洋先生、冲永裕子先生が登壇し、本邦における肝胆膵外科医の現状と自身のキャリアについてお話されました。

今回は新たな試みとして、まず Tips for successful medical presentation というテーマでの教育講演が行われました (Abigail Shin, Seoul National University)。彼女自身は MD ではありませんが、聴衆の興味を引く方法、発表中の目線、ジェスチャー、スライドの構成や図表に関してなど 10 のポイントに分けて丁寧に解説していただき大変参考になりました。韓国では年 2 回、若手肝胆膵外科医向けの教育セミナーが開催されていることはこれまでご報告してきましたが、その一端を垣間見た形となりました。他の発表で韓国の若い先生方の発表を聞いて

ていまして英語が非常に流暢でプレゼンテーションも洗練されており、2017 年から続いている取り組みの効果を実感しました。

続いて日本側より肝胆膵外科の現状とキャリアについての発表がありました。石井範洋先生より外科医数が減少傾向にあること、特に若い外科医が減少し外科医の平均年齢が 50 歳であること、肝胆膵外科高度技能専門医の概要についてお示しいただきました。石井先生のこれまでのキャリアについて、大学病院を中心にトレーニングを積み、学位を取得し、基礎研究・臨床研究にも従事するという、本邦における肝胆膵外科医の典型的ともいえる道筋をご紹介いただきました。次に沖永裕子先生からは本邦における女性外科医の数、働き方改革の現状についてお示しいただきました。沖永先生は旦那さんも肝胆膵外科医でお子さんが 4 人いらっしゃることから、子育てと仕事のキャリアアップを両立するにあたっての工夫やチーム制への移行など勤務先での取り組みについてご紹介いただきました。司会の Park 先生からは、東京大学における一人目のママさん肝胆膵外科医ということで素晴らしいロールモデルになっていますねとのコメントが有りました。

韓国側からは今回、少し変わったキャリアを積んできた先生方より発表がありました。Seok-Hwan Kim は第 35 回日本肝胆膵外科学会総会の Rising star session でも講演されていましたが、肝胆膵・肝移植外科に加えて様々な基礎研究にも積極的に取り組まれている先生です。今回は、Kim 先生が行われている海外ボランティアの取り組みについて紹介していただきました。Kim 先生は夏季休暇や冬季休暇に医学部生（臨床実習を行っている学年）を連れてアフリカのウガンダにて診療や手術手技を含む医療支援を 2 週間程度行われています。他国からの参加者との交流もあり、ボランティアに参加する学生はモチベーションが高く、ボランティアに参加した医学生が卒後にいわゆるメジャー科を専攻することも多いようです（全体では皮膚科が人気）。これまで 10 年以上の実績があり、費用に関しては多くの寄付金に支えられているとのことでした。Kim 先生自身が以前から医療ボランティア、支援に興味があったことがこの取り組みに参加するきっかけであったようですが、社会貢献の重要性を改めて認識しました。また、Dakyum Shin 先生は肝胆膵外科医としてのトレーニングを中断してベッドフリーとなり、基礎研究に従事した経験についてお話されました。日本では比較的好く見るキャリアですが、韓国では非常に稀であり、様々な人に外科のキャリアを中断することについて考え直すことを進められたと話していたのが印象的でした。そんな中でも臨床での疑問と基礎研究とをつなぐ Translational research の重要性を強調され、調先生も賛同されておりました。なお、ベッドフリーの間の給与はアルバイトで捻出していたとのこと、我々としても親近感がありました。

各先生方の発表が終わった後、会場にいらっしゃった台湾の先生から将来的に台湾の若手肝胆膵外科もぜひ日韓を做ってコラボレーションしたい、台湾には肝胆膵外科の認定制度

はないが、おそらく専攻医の数は減少しているとの発言がありました。一方インドは少し事情が異なるようで、移植医療の拡大とともに消化管外科から移植外科に鞍替えする先生が多くなっているとのことでした。



今回も会場の内外で様々な情報交換を行いました。昨今話題となっているレジデント大量辞職ですが、やはりその影響は少なく無いようで、話した先生方（Professor）からも「そのおかげでさっきまで病院にいた」、「明日帰って勤務しないといけない」などの声が聞かれました。医学部の定員が3,000人のところを一気に5,000人に増員しようとする政策に対して、増員される学年と比較的近く、大きな影響を受けることを懸念したレジデントが特に強く反発しているとのこと。実際のところハード面（教室や教員の確保）も全く追いついていないようで、医師数増加に舵を切る前に保険制度の改革をしてほしいという意見も聞かれました。例えば多くの手術費が日本の約5分の1程度に設定されていること、腹腔鏡と開腹で費用が変わらないこと、腹腔鏡下臍頭十二指腸切除の点数が腹腔鏡下胆嚢摘出術のわずか3倍に抑えられていること、ロボット肝胆膵外科手術がいずれも保険でカバーされていない（患者負担）ことなどは、国は違えど同じ専門職として厳しい環境にあると感じました。また、次の日韓コラボレーションの提案として共同研究や交換留学、日本人若手医師の韓国 educational seminar への参加などの意見が出ました。今後の検討課題として議論を進めていきたいと思えます。

文責：原 貴信（長崎大学）